この人をたずねて

広島大学大学院総合科学研究科 准教授
入戸野　宏氏

インタビュー
山田祐樹

Profile ── にっとの　ひろし
1998年，大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程修了。博士（人間科学）。広島大学総合科学部助手，助教授を経て現職。2004年より国際心理生理学機構（IOP）理事，2010年より同事務局長。専門は認知心理生理学，工学心理学。著書は『心理学のための事象関連電位ガイドブック』（単著，北大路書房），『心理学基礎実習マニュアル』（共編著，北大路書房）など。

■ 入戸野先生へのインタビュー

──「かわいい」研究を始められたきっかけについてお聞かせください。

5年ほど前，学生が「かわいい」についての研究をしたいと言ってきました。最初はとまどいましたが，手探りで始めたのがきっかけです。私の専門分野は二つあります。ヒトの心理活動を主観・行動・生理の3側面から眺める心理生理学と，ヒトとモノ（コンピュータやメディアなどの人工物）との関係を調べる工学心理学です。

もともと私は，日常生活で起こりうる具体的な場面での心理活動を包括的に扱ってみたいと考えていました。「かわいい」というのは，小さい子からお年寄りまで誰もが知っている日常的なテーマです。認知や感情といった個人内過程にとどまらず，社会的関係や発達，性差・文化差までを含んでいます。その日常性と幅広さを面白いと思ったのが，研究を始めた一つのきっかけです。

もう一つ，「かわいい」はモノによって媒介されます。地域の活性化をめざした「ゆるキャラ」などが盛んに作られていますが，そういったモノが人間の認知や感情，行動に与える影響を知ることは，工学心理学として面白いテーマです。

──「かわいい」について，これまで明らかになったことと今後の展望についてお聞かせください。

研究を始めたとき，「かわいい」に関する文献を徹底的に調査しました。主に人文学や社会学に基づくエッセイが多く，心理学的に「かわいい」をどう捉えたらいいのか，結局よくわかりませんでした。実験心理学では，ローレンツのベビースキーマの考え方に基づき，幼児の顔や体型の特徴とかわいさの知覚との関係を調べた研究があります。しかし，どんな身体的特徴をかわいいと感じるかを調べたとしても，私たちが日常生活で体験する「かわいい」の本質には迫れない気がしました。データがなければ建設的な議論はできないので，とにかくデータをとることから始めました。まずは「かわいい」という言葉に対するイメージ ── たとえば「美しい」や「きれい」とはどう違うのか ── を調べました。すると学生や社会人はある程度一貫したイメージを「かわいい」に対して持ち，男女を問わず多くの人が「かわいい」に関心を持っていることがわかりました。このようなアンケート調査は，学術的価値は低いですが，「これからこの研究を進めていこう」という自信につながりました。

何をかわいいと思うかは人それぞれです。しかし，ある対象をかわいいと感じるときの心の状態にはきっと共通点があるはずです。そこで，私は「かわいい」を対象の属性ではなく，その対象に接する人が抱く感情として捉え，その感情の性質や機能を探るという方略をとりました。コロンブスの卵のような発想の転換が，実証的に研究を進める糸口となりました。かわいいものを見ているときの生体反応を計測したり，主観的にどう感じているかを質問紙で答えてもらったり，行動的なあらわれを調べたりといった実験をしています。「かわいい」が怒りや恐怖のような個別感情といえるかはまだわかりませんが，接近動機の高いポジティブ感情であることは確かです。

現在は，「かわいい」感情が行動パフォーマンスや注意の範囲に及ぼす効果を調べています[1]。また，ベビースキーマの考え方の根底にある「幼さ」と「かわいさ」の関係についても批判的に検討しています。幼さはかわいさの十分条件でも必要条件でもないということを示すとともに，女性性とかわいさの関係についても研究を始

めました。この研究によって，「ベビースキーマを持つ対象はかわいい」という旧来の単純な図式を超えた新しい「かわいい」像を提示できるのではないかと期待しています。「かわいい」には，生物学的な基盤を持つ感情としての「かわいい」と，文化に左右される価値観としての「かわいい」があります。「かわいいの二層モデル」と名づけたこの仮説に基づき，今後は「かわいい」の文化差にもアプローチしたいと考えています。

――「かわいい」研究の魅力とは何でしょうか？

最大の魅力は，日本から発信できる数少ないオリジナルな研究テーマであるということです。これはまさにチャンスです。日本語の「かわいい（kawaii）」は，アニメやキャラクターグッズ，ファッションを通じて，世界中で知られるようになりました。「かわいい」という感情には生物学的な基盤があるはずですから，海外でもそういった製品がある程度受け入れられることは想像できます。しかし，ただモノを作って売るだけでなく，「かわいい」とはこういうものなのだと理論的に説明できるようになることが，日本人 ―― 日本の心理学者 ―― の仕事だろうと考えています。その知識を使ってかわいいものがデザインできるようになれば，商品に付加価値をつけることもできます。

土居健郎が提唱した「甘え」という概念が世界に影響を与えたように，「かわいい」の心理学も日本から発信できるはずです。そうしないと，近いうちに他の国に先を越されてしまうでしょう。いま日本の心理学者が「かわいい」に取り組めば，オリジナリティの高い研究として評価され，世界的な注目を集めるはずです。焦りも感じますが，「かわいい」は日本の歴史と文化を背負ったテーマなので，本家としての自信をもって研究を進めています。

――「かわいい」研究の展開にあたって気をつけられている点などありますか？

このようなポップな研究テーマは，大衆に迎合して粗雑になりやすい傾向があります。一般受けするテーマだからこそ，方法論を慎重に選んできちんと進めないといけません。「かわいい」に興味をもって，まじめに研究する人が増えることを期待しています。

■インタビュアーの自己紹介

インタビューを終えて

入戸野先生はこれまで非常に幅広い研究テーマを扱ってこられました。その中であえて今回は「かわいい」研究に絞ってインタビューさせていただきました。その理由は先生が語っておられるように，非常にチャレンジングながらもそれだけ価値のある，日本人として勝負に出るべき研究対象だからと思うからです。そのため，今回せっかく貴重な機会をいただけたので，「かわいい」を研究するということについて皆様にお知らせしたかったという思いがありました。うまくお伝えできていれば感無量です。

研究スタイル

話は変わりますが，実は私は自分の研究スタイルに悩んでいます。私は俗に「現象系」と呼ばれる，やってみた感の強い研究スタイルを持ち味にしていたのですが，実は「理論系」と呼ばれる，理論検証型のスタイルのほうが良いのではと感じることがあるのです。そのことを率直に入戸野先生に相談したところ，以下のアドバイスを頂きました。

――どちらが良いとかではなく，他人とは違うテーマや自分の強みが活かせるスタイルを選ぶ他ないのではないでしょうか。自分より優れた知識・スキル・研究環境をもっている人は世界中に大勢います。できないことはできないのですから，それを気にしても落ち込むだけです。私は自分にできるちょっと変わったテーマを取り上げ，堅実な方法で取り組むことをめざしています。「かわいい」の研究もそうです。変わったテーマを取り上げる以上，方法論がしっかりしていなければ揚げ足をとられますからね。――

なるほど。先生にご相談できたことで大変励みになりましたし，現象系と理論系の両方が存在し得る心理学という学問についてより興味深く感じるようになりました。心理学はかわいいです。

---

1 インタビュー後，Nittono et al., 2012 として PLoS ONE 誌にて刊行。全世界で 70 以上のメディアに取り上げられ，国際的に大きな注目を集めている。

Profile ―― **やまだ　ゆうき**
山口大学時間学研究所特命助教。2006 年から 2012 年まで日本学術振興会特別研究員。2009 年から 2012 年まで九州女子大学人間科学部非常勤講師。2012 年より現職。九州大学大学院人間環境学研究院学術共同研究員を兼任。論文は Emotion colors time perception unconsciously（共著，*Consciousness and Cognition* 誌掲載），Temporal course of position shift for a peripheral target（共著，*Journal of Vision* 誌掲載）など。